

2006 (平成 18) 年 5 月 17 日

東京都病害虫防除所

平成 18 年度 病害虫発生予察情報 特殊報 第 1 号

病害虫名： タバココナジラミ バイオタイプ Q
Bemisia tabaci Q-biotype

対 象： 花き類

1. 特殊報の内容

東京都内でタバココナジラミ バイオタイプ Q の発生を初めて確認した。

参考：タバココナジラミ バイオタイプ Q とは？

タバココナジラミ類には形態的に識別困難な 40 以上の系統(バイオタイプ)が存在している。近年、在来系統(バイオタイプ不明)や“バイオタイプ B”(シルバーリーフコナジラミ)とは系統の異なる“バイオタイプ Q”が国内に侵入したことが明らかとなっている。“バイオタイプ Q”は、ピリプロキシフェン剤、一部のネオニコチノイド剤、合成ピレスロイド剤に対する感受性が低いことが報告されている。

2. 発生経過など

- (1) 2006 年 1 月下旬、都内の花き類栽培施設にて採集した、タバココナジラミ類のサンプルを、独立行政法人 野菜茶業研究所果菜研究部虫害研究室に送付し、バイオタイプの検定を依頼した。その結果、12 サンプル中 5 サンプルでバイオタイプが判明し、それらのうち 4 サンプルがバイオタイプ B、1 サンプルがバイオタイプ Q であると判定された。
- (2) 2006 年 5 月現在、東京都内(区部・多摩地区)におけるタバココナジラミ類の発生は、上記発見地点のみである。また、トマトで発生しているコナジラミ類はすべてオンシツコナジラミ(トマト黄化葉巻病ウイルスを媒介しない)であり、トマト黄化葉巻病の発生も確認していない。
- (3) なお、東京都では、1989 年にタバココナジラミ(シルバーリーフコナジラミ)初確認の特殊報(平成元年度 特殊報 第 1 号)を発表している。

3. 形態

- (1) シルバーリーフコナジラミ(“バイオタイプ B”)との形態上の差異は成虫・幼虫ともに確認されておらず、肉眼での区別は困難である。なお、オンシツコナジラミとの区別は可能である(図を参照)。

4. 分布・生態

- (1) 本バイオタイプは 1996 年にスペインで初めて確認され、その後 2003 年にイタリアおよびイスラエル、その後中国雲南省および北京で発生が確認されている。国内では 2005 年 2 月に宮崎県で初確認され、同年には九州、山陽山陰地域で発生を確認、関東地域では 2006 年に入ってから神奈川県、千葉県、栃木県、茨城県、埼玉県、群馬県で発生が確認されている。
- (2) 他県では、ナス科、ウリ科、シソ科など多くの野菜類・花卉類等への寄生が報告されている。

5. 被害

- (1) シルバーリーフコナジラミと同様の被害を起こすと考えられ、トマト黄化葉巻病ウイルス (TYLCV) の媒介、成虫の吸汁による生育障害、成虫の分泌物に起因するすす病による葉・果実等の汚れが問題となる。

6. 防除対策および注意

- (1) シルバーリーフコナジラミに比べ薬剤抵抗性が発達しており、ピリプロキシフェン剤、一部のネオニコチノイド剤、合成ピレスロイド剤に対する感受性が低いので注意する。薬剤散布に際しては、有効薬剤に対する抵抗性の発達を回避するため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- (2) 施設栽培では目合いの細かい (0.4 mm) 防虫ネット、紫外線カットフィルム、光反射マルチ、黄色粘着板等を活用し、コナジラミ類の侵入防止・密度抑制につとめる。
- (3) ほ場内、周辺の雑草は発生源になるので除草を徹底する。
- (4) 都内では、コナジラミ類が増加する 6 月から 7 月に栽培を終了するトマトの作型が多い。栽培中に発生したコナジラミ類を施設外に出さぬよう、栽培終了後は施設の蒸し込みを行い、コナジラミ類を死滅させるようにする。

7. 図

左：オンシツコナジラミ

右：タバココナジラミ類

成虫



白っぽい，翅の間に隙間が少ない。



黄色っぽい，翅の間に隙間がある。

蛹

背面より



白っぽい，毛が多い。



黄色っぽい，毛が少ない。

側面より



軍艦巻き（コロケ）状。



扁平状（中央部のみ厚みがある）。